
ハリー・ポッターと異世界から来た少年

花鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリー・ポッターと異世界から来た少年

【NZコード】

N4824M

【作者名】

花鳥

【あらすじ】

ハリー・ポッターの世界にオリキャラといつ存在が入ったらいつなるか？

ふと思つて書こうと思いました。基本原作通りに進めていこうと考えております。不定期更新になりますがどんどん感想送つてください。

誹謗・中傷などはお断りします。

プロローグ

Side ???

あれ。ここは何処だ?
家じゃあねえな。

辺りを見ても何もない。ただ、白い。

「はあ～何でこんな所にいるんだ?てか、ここ、何処?」

一人漫才してると

「フオフオ。気がついたようじやのう。

どこからか現れた老人が俺の前にいた。

「あんたは?」「ワシは君達の言う神じやのう。」

「はあ。神様ねえ。何でその神様が俺の前にいるんだ?」「すまん
かつた。うつかり殺してしもうた。」
と言いやがった。

「ふざけんな。」「ドカバキバキグシャギヤー

少々、お待ちください。

「それで、俺はあんたのせいで死んで、生と死の狭間にいるんだな
?」

「はい。その通りです。」

めちゃくちゃ腰低くなつたな神様。

「それで、お主を別世界で第二の人生を楽しんでくれ。」

これがよく一次創作である転生か。ん。てか、どこに転生するんだ。
疑問に思つたので神に聞くと、

「ハリポジャ。」ヤツターー(^○^) /

マジでハリポの世界に行ける。なんてたつて、俺はハリポタの大ファン。原作の小説も全巻持つてるし、映画もまだ上映されてない死

の秘宝以外全部見たからな。

「お主の願いを3つ叶えてやる。」って神が言つてきた。
よし、それなら「一つ目は俺の顔をイケメンにしてくれ。二つ目は、
モンハンのクシャルダオラを連れていく。3つ目はあっちの世界で
普通に暮らせるだけの金をくれ。」「わかった。二つ目のクシャル
はハリポの世界で合流してくれ。そーい。」
俺の隣にトランクが現れた。

「その中に、金とお主の私物を入れといたらから。それじゃ行つて
こい。」

パカッと足下が開いて、

「ふざけんなあ～～」神に向かつて言いながら落ちていった。

第一印象は大切です。（前書き）

ダンブルドア先生の口調が合ってるか不安です。

第一印象は大切です。

S i d e ? ? ?

「落ちてゆく。あの、ジジイ。今度、会つたら許さへね。てか、どんだけ落ちてゆくんだ。あつ。光が見えた。」

光が急に光つて目を瞑つていると、光が收まり目を開けるとそこは、

「部屋？」

そう彼は、何処かの部屋にいた。

「ここは何処だ？ハリポタの世界で合つてるとと思うが？」

彼がぶつくさ言つてると

「はて、さて。君は何処からわしの部屋に入ったのじや？」
後ろから、深く穏やかな声が、聴こえた。

S i d e ダンブルドア

わしは用事をすましてホグワーツに帰つて來たんじやが、誰かがわしの部屋にあるのう。ミネルバやセブルスではないのう？「はて、さて。君は何処からわしの部屋に入ったのじや？」と部屋の中にいる人に声を掛けると、同時に部屋に入るとそこにはハリーと同い年くらいの少年があつたの。S i d e ? ? ?

まさか、まさか本物の「ええつとダンブルドアさんですか？」

「わしがダンブルードアじゃ。」ヤツタ＼(^o^)／ご本人キタ

।。

「さて。何故、君が教えて貰おうかのう。」

あつ、やつぱり。さて、俺の事を話しますか。信じてくれるかな？

「…と言つことです。」

「異世界からの。それで君は気がついたらわしの部屋にいたと。」「はい。」

不味いぞ（ - - - ）信じてない氣がする。何としても信じてもらわねば、あつ。そういえば、神がトランクに俺の私物を入れたって言ったから、アレがあるはずだ。アレとはそうハリポタの小説全巻。

入つてた（^。^・。）

これを見て貰えば、信じてくれるはずだ。

「ダンブルドアさん。これを読んでください。」

読書中…

「わかった。君を信じよひ。」
「わししか知らない事が書かれてあるからのう。」

「ありがとうございます。」

なんとか信じてくれた。

「君の名前を教えてくれんかのう？」

「そういえば、名前を言つてなかつた。」

「崎島 良夜です。」俺は名乗つた。

「そうか。リョウヤか。ワシはホグワーツ校長アルバス・ダンブルドアじや。ダンブルドア先生と呼んでくれると嬉しいのう。」と手を出してくれた。

そして、俺とダンブルドア先生は握手をした。この後、俺自身が願つた物に出会う事は知らずに。

おまけ

「リョウヤ。お主には一年生に入つて貰つゞ。」

「えつ、俺、18歳なんですけど。」

「そうなのか、リョウヤ。しかしお主、どうかいぢり見ても11歳の少年にしか見えんぞ。」

「…………なんじじや」「つや~~~~~」

何か忘れてる気が、あつ。ギャー喰われる。

S·i·d eリョウヤ

俺とダンブルドア先生が握手して、これから的事を話そつとじよつと
ドドド…何か遠くから地響きが聴こえる。あつ、もつそこまで来て
る。

バターン

「た、大変です、ダンブルドア先生。い、急いで来てください。
ハグリッド、キター。本物デケーなさい。

めちゃくちゃ焦ってるな。何かあつたんだろうか？

「どうしたんじゃ、ハグリッド？落ち着いて喋つておくれ。」 「

スーア。スーア。実は、」

S·i·d eハグリッド今日は、ラツキーな日だな。久しぶりに、ゴニ
ゴーン達に会いに言つたら元気そうだったからな。
さつせと、家に帰つてファングに餌やんねえとな。うん。なんだ、
あの光は？うお。眩しい。む、光が收まってきたな。なつ。なんだ、
このドラゴンは、俺が見てきたドラゴンの中で一番だぞ。こいつは。
佇んでいるだけなのに王者としての風格が肌で感じる。どつから來
たか分からねえが、急いでダンブルドア先生に知らせねば。

S·i·d eリョウヤ

うん。めちゃくちゃ冷汗が出てきた。絶対、俺が神に頼んだヤツだ。
どうしよう？

「ふむ。ハグリッド、わしをそこまで案内してくれないかのう。」

「わかりました。あのダンブルドア先生。それとそこにいる少年は
？」

ハグリッドがこいつを見てきた。「おお。そうじやつた。リョウヤ。

自己紹介しなさい。」

ダンブルドア先生。絶対、俺の事忘れてたでしょ。ちりつと見ると、
目を反らしやがった。

「おい、マジで忘れたのかよ。泣くよ。さすがに今のは心にグサッときたよ。

「えーと、初めまして。ホグワーツに入学する事になつた崎島 良夜です。どうか宜しくお願ひします。」

「俺は、ルビウス・ハグリッド。ホグワーツの鍵と領地を守る番人だ。宜しくなリョウヤ。」俺とハグリッドは握手した。

ハグリッドの手でかいな。

「それじゃ、行こうかのう。ハグリッド、リョウヤ。」俺とハグリッドが握手してゐる最中にダンブルドア先生。部屋出ようとした。「しないでください。

移動中……

「やつと、つきました。禁断の森。」

「リョウヤよ。誰に言つておるのじや

はつ、電波が来たような氣が。「ダンブルドア先生。いました。例のドラゴンです。」

「ほつ。あれが美しいドラゴンじやのつ。」

ダンブルドア先生が、言つたように本物のクシヤルダオラだ。めちゃくちゃカッコいい。

「汝が我をここに呼んだか? さすが、古龍。知能も凄く高い。

「ああ。俺がお前を呼んだ。俺の名前は良夜だ。お前の名は?」

自己紹介しながらクシヤルに聞くと、

「ふむ。我らは人間共にクシヤルダオラと呼ばれているが、名前はない。主よ。我に名前をつけてくれぬか? く

なんと俺が名前をつけるのか。名前、何にしよう。確かクシヤルは風は操るから、

「よし。お前の名前はストームだ。」「ふむ。ストームか。なかなか良い名前をつけてくれて、感謝する。我が主。」

「あのひ、ストーム。」

「何だ、我が主。」

「その主つてのを辞めてくれ。背中がむずむずするからリョウヤと

呼んでくれ。」

「わかつた。これからは『ヨウヤ』と呼ぼう。なんとか、主つてのを辞めもらつたぜ。

あつ。こいつ何処に住まわせよつ？それにワーロック法があるから困つたな。そうだ、『ヨウヤ』ダンブルドア先生に聞こつ。

「このドラゴンには、この森にいてもらおう。ハグリッドには世話をさせよ。それから生徒には見つからなこよひに『ヨウヤ』よ。このドライgonに言つてくれぬか？」

あつさり許可くれた。何故、そんなにあつさり許可くれたのか聞くと、ハグリッドがドラゴンを飼いたいって言つてたからという理由だ。

まあ、原作を知つてゐるからハグリッドがドラゴン「ロバート」で事は知つてゐるから、ハグリッドをちらつと見ると田からビームが出るぐらい輝いてる。

さて、ストームに言わないとな、もつ少しで学園生活始まるし楽しみだ。

何か忘れてる気が、あつ。ギヤー喰われる。（後書き）

おまけ。

「リョウヤ、この世界に来た時、我的事を忘れてなかつたか？」
びくつ。

「ワスレテナンカイマセンヨ。ストームサン。」

「片言で説得力がないぞ。リョウヤ。許さんゼ——（＊、＊、＊）」

。＜

「ギヤ マジで喰われる。誰か助けて——。」

リョウヤは一時間以上ストームに追いかけられた。

その間のダンブルドアとハグリッドは。

「平和じゃのう。ハグリッド、お茶を一杯いただこつかの。ブランディたっぷりのをな」「はい。先生。行きましょう。それと先生。リョウヤはどうします？」

ちりりとつヨウヤを見てみるとダンブルドアが「あのドラゴンとあそんでおるから奥にじゅうづ。」

本当に誰でもから良いくから助けて
待たんか、リョウヤ。

いや

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4824m/>

ハリー・ポッターと異世界から来た少年

2010年10月11日05時45分発行